

## 遷延性意識障害患者における座位姿勢保持を目指した看護介入

兼山 成子、大西 弘子、兼松 由香里、石山 光枝、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

【はじめに】2年の療養生活を経て在宅介護に移行する患者に対し、「穏やかに家族団らんのもちたい」という家族の思いから、座位姿勢を保持できるようにという視点でバランスボールを取り入れたケアを行った結果、患者の変化が見られたためここに報告する。【事例紹介】H氏50歳代女性 最小意識状態 認知面は向上しつつあったが、全身の筋緊張が強く、車椅子への乗車時も体幹が伸展し姿勢が崩れてしまい、更に手のこわばりにより姿勢を整える事が困難であった。【方法】バランスボールを取り入れた日課表を作成し週6日間の4週間実施した。患者を後ろから支えバランスボールに座らせて約10分間揺らす。その後胡坐座位を5～10分実施した。【結果】全身の筋緊張が緩和し、座位時にみられた体幹の伸展と、手のこわばりがなくなった。そのため車椅子乗車時前傾姿勢が取れるようになり、自身でバランスをとることが出来るようになった事で、安定した座位姿勢が保持できるようになった。【考察】座位姿勢を保つためには、体幹を保持する力とバランスを整える力が必要である。バランスボールによる運動により、座位保持を担う筋力が付き、座位が安定したと考える。そして、揺らす事による細かな振動の連続により、手の異常なこわばりの緩和につながったと考える。また、バランスボールに乗った不安定な状態で足をしっかりと着地させることで、姿勢を整えようとする力が引き出されたのではないかと考える。更に後ろから抱えられるような姿勢で行う事で安心感と緊張緩和効果を持って行えた事が、座位姿勢の保持へと繋がったと考える。